　朝霧を割くように、黒鳥が飛翔する。
　その黒鳥は、濃霧の中にあってもはっきりと目的地を知っている。まだ目覚めぬ深い森の中、木々の隙間を縫い、まっすぐにその場所へ飛ぶ。
　風を掴んだ黒鳥は、やがて広い空間に出る。
　不思議なことに、その空間には、一寸先も見えないほどだった濃霧が寸分もかかっていない。注ぐ朝陽を反射して、黒鳥の瞳がきらめいた。
　その空間には、かつては人が住んでいたと思しき、いくつかの朽ちた建造物があった。
　黒鳥は空中で、それらの建造物を見渡すように旋回する。
　廃墟と化したその集落に、ただひとつ、形を成している一件の大きな屋敷があった。経年を感じさせないその屋敷は、この廃墟の中で明らかに浮いていた。
　黒鳥は羽を畳み、その屋敷の二階、バルコニーの手摺へと降り立った。
　そして、観音開きのガラスの扉に向かって一声鳴いた。
　数秒後、ガラスの扉の向こうの白く分厚いカーテンが開かれる。
　中にいた茶髪の青年が黒鳥を認め、扉を開けてバルコニーへと出て来た。
　青年は静かな表情で、黒鳥の右足に結ばれている文を解いた。
　差し込む朝陽に目を細めながら、自分に宛てられたその文面に目を落とした。

『ベイリフへ。
　らしき人物を見かけたが、逃亡した。
　しかし、例の場所で書物を回収することはできた。
　ハングドと合流したら、屋敷へ戻る』

　手紙の受け取り主の青年――ベイリフは静かに手紙を畳み、役目を終えて再び空へ飛び立つ黒鳥を見送った。